

公 民 [倫 理] (100 点 50 分)

2022 年 12 月 6 日 (水) 1 限 実施

第 3 回 考 査

千葉県立佐倉高等学校 第 3 学年 A～G 組

Edited by K.Kataoka

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 解答用紙はマークシート式です。
- 3 受験番号はアルファベットを数字に直し、次の例のように 5 桁で記入してマークを忘れないこと。
例 3 年 D 組 1 番 → 30401
- 4 試験中に解答用紙の不足、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 5 試験終了後、問題冊子は持ち帰って復習をするとともに、答案返却の際に持参すること。

倫 理

(解答番号 [1] ~ [5])

第1問 次の文を読み、下の問い(問1~問5)に答えよ。(配点 20)

近代における人間尊重への口火を切ったのは、14世紀から16世紀に北イタリアを中心としてヨーロッパ各地に広がったルネサンスである。当時北イタリアには、十字軍以来の東方貿易によって富を蓄積し、実力をたくわえた都市が発達していた。自由で活気に満ちた経済活動が、教会や封建制にしばられない新しい文化を求める気運をもたらしたのである。ルネサンスとは「再生」という意味であり、具体的にはギリシャ・ローマ文化の復興を意味しているが、そのねらいとするところは、ギリシャ・ローマ文化の復興を通じて、中世の教会中心のあり方から自由な、人間中心のあり方を追究することにあつた。この運動は一般に、[1]とよばれている。

ルネサンスが進行していた16世紀、宗教改革がはじまった。当時、ローマ・カトリック教会は資金集めのために贖宥状を売り出し、それを買えば犯した[2]と説いていた。1517年、ドイツの神学者ルターはこうした教会のあり方に抗議して、「95か条の意見書(論題)」を教会の扉にはり出した。これが宗教改革のはじまりである。ルターは、カトリックの伝承や教権、儀礼などを否定し、[3]に回帰することをモットーとした。また、ジャン=カルバンはジュネーブにおいて、より組織的かつ徹底的な改革を行ない、改革派教会を確立した。

ルネサンスと宗教改革という二大改革をへて、ヨーロッパでは、自己の理性にもとづいてこの世界を生きていこうとする近代人の新しい態度がしだいに形成されていった。この態度を決定づけるものが、従来の学問である[4]にかわる新たな学問、近代科学の誕生である。この学問は、実験と理性を通じて自然法則を見出すことによって、自然のメカニズムを明らかにしようとする。例えば、天動説に対して地動説をとらえたコペルニクス、振り子の等時性、慣性の法則など力学上重要な諸法則を発見したガリレオ・ガリレイ、惑星の運動法則を発見したケプラーなどによる自然探究がその代表である。

とはいえ彼らの自然探究はキリスト教とまったく無縁の地盤から生じたものではない。むしろ、自然の秩序を明らかにすることが、この宇宙を創造した神の栄光をあらわすことになるとする信念が彼らを自然探究へとかり立てたのであつた。しかし、結果として、その探究は、自然を神学的解釈から解き放つ役割をはたすなど、自然観や[5]の転換をともなうものであつたので、「科学革命」ともよばれる。

問1 文章中の空欄[1]~[5]に入る最も適当なものを、次のそれぞれの①~④のうちから一つずつ選べ。

- [1]

① ペシミズム	② マニエリズム
③ ヒューマニズム	④ モダニズム

- [2]

① 罪の贖いが行われる	② 罪が赦される
③ 罪が免除される	④ 罪の償いが免除される

- [3]

① 聖人	② 聖遺物
③ 聖書	④ 秘蹟

- [4] ⌈ ① スコラ哲学 ② 経験論哲学
 ⌋ ③ 合理論哲学 ④ ストア哲学
- [5] ⌈ ① エピステモロジー ② パラダイム
 ⌋ ③ パラドクス ④ エピステーメー

問2 ルネサンス期の文学・芸術についての説明として**適当でないもの**を、次の1~4のうちから一つ選べ。[6] (2016年本試)

- ① ボッカチオは、快楽を求める人々の姿を描いた『カンツォニエーレ』を著し、人間解放の精神を表現した。
- ② レオナルド・ダ・ヴィンチは、解剖学などを踏まえた絵画制作を通じ、人間や世界の新たな表現法を提示した。
- ③ アルベルティは、建築を始め様々な分野で活躍し、自らの意欲次第で何事をも成し遂げる人間像を示した。
- ④ ダンテは、罪に苦悩する人間の魂の浄化を描いた『神曲』を著し、人文主義的な機運の先駆けをなした。

問3 人文主義者についての記述の空欄 [7] に入る最も適当な語を、下の①~④のうちから一つ選べ。

『自由主義論』は [7] の著書。1524年刊。人間が真面目な意志によって善行を積み一步一步道徳的に向上しようと確信していた [7] は、「信仰によってのみ」救われるというルターの説が人間の一切の善の試みを無に帰し、ついには神は不正であるとの観念にいたらしめ絶望へと導くものであるとして、人間の自由意志を擁護すべく『自由意志論』を著わして、宗教改革運動に批判的な態度を示した。ルターは翌年『不自由意志論 (奴隷意志論)』 *De servo arbitrio* を書いて反論し、[7] から人文主義者と決別した。なお [7] は 26年『ルターへの反論』を著わして再び反論を加えた

- [7] ①ピコ ②トマス・モア ③エラスムス ④ ペトラルカ

問4 16世紀ヨーロッパの宗教改革の説明として**適当でないもの**を、次の①~②のうちから一つ選べ。[8] (2016年追試改題)

- ① ルターは、人間が神によって義とされるのは、教会の定める儀式や善行によってではなく、もっぱら信仰によってであると主張した。
- ② ルターは、主著『キリスト教綱要』において、僧侶の腐敗を鋭く批判し、教会のもつ既存の権威や権力に対して抵抗しなければならないと主張した。
- ③ カルヴァンは、神の栄光を実現するために、神から与えられた神聖な義務としての職業に勤勉に励むべきであると主張した。
- ④ カルヴァンは、神に対する人間の絶対服従を強調し、厳格な神学に基づく教会改革が必要だと主張した。

問5 次のア、イの意見を述べた人物として最も適当なものを、アについては [9] に、イについては [10] に、下の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

ア 1ポンドと5ポンドといったように、重さの異なる二つの鉛の塊があるとしよう。それらを100フィートの高さから落としたとする。もし二つの塊が結び付けられているとしたら、アリストテレスは何によって落下速度を決めるのだろうか。

イ 宇宙には固定した中心はなく、際限のない空間で、数限りのない世界（天体）が運動している。さらに事物の内的構成にかかわる「原理」と外的力としての「原因」を区別し、無限な宇宙の第一原因として、すべてをつくり動かすと同時に、形相原理として、質料原理に形を与える宇宙霊を考える。この宇宙霊によってまとまりをもつ無限な宇宙が、神の足跡、神の展開である。

[9] ①ケプラー ②ガリレオ ③ブルーノ ④ ニュートン

[10] ①ケプラー ②ガリレオ ③ブルーノ ④ ニュートン

問1 ベーコンが批判した四つのイドラの記述として最も適当なものを、次の①~④のうちから一つ選べ。[16] (2010年本試)

- ① 種族のイドラ:人間は、正確な感覚や精神を具えているが、個人的な性格の偏りや思い込みによって、事物の本性を取り違える可能性があるということ
- ② 洞窟のイドラ:人間は、種に特有の感覚や精神の歪みを免れ得ないため、人間独自の偏見に囚われて、たやすく事物の本性を誤認してしまうということ
- ③ 市場のイドラ:人間は、他者との交流の中で人が発した言葉を簡単には信頼しないため、しばしば真実を見失い、不適切な偏見を抱きやすいということ
- ④ 劇場のイドラ:人間は、芝居等を真実だと思い込むように、伝統や権威を盲信して、誤った学説や主張を無批判的に受け入れてしまいがちだということ

問2 哲学の歴史では「疑うこと」が様々な役割を果たしてきたが、次のア~ウは それらについて説明したものである。その正誤の組合せとして正しいものを、下の①~⑧のうちから一つ選べ。[17] (2014年追試)

- ア デカルトは、少しでも疑い得るものは虚偽としてしりぞける方法的懐疑を徹底した結果、疑っている限りの私の存在だけは確実であると考えに至った。そして、それを土台にして、一切の学問を築き上げようとした。
- イ ヒュームは、経験論を徹底させて、人間の心は単なる「知覚の束」にすぎないと主張した。そしてそこから、実在するのは流れゆく知覚だけで、実体としての精神は存在しないという懐疑的立場を取った。
- ウ カントは、人間の認識能力を検討して、「物自体」は認識できず、人間の主観によって対象は構成されると考えた。それゆえ、「存在することは知覚されること」だと主張し、物体の実在を否定する懐疑的結論に至った。

- ① ア正 イ正 ウ正 ② ア正 イ正 ウ誤
- ③ ア正 イ誤 ウ正 ④ ア正 イ誤 ウ誤
- ⑤ ア誤 イ正 ウ正 ⑥ ア誤 イ正 ウ誤
- ⑦ ア誤 イ誤 ウ正 ⑧ ア誤 イ誤 ウ誤

問3 実体について考察したライプニッツの説明として最も適当なものを、次の①~④のうちから一つ選べ。[18]

- ① 実体とは不滅の原子のことであり、世界は原子の機械的な運動によって成り立っていると考えた。
- ② 存在するとは知覚されることであるとして、物体の実体性を否定し、知覚する精神だけが実在すると考えた。
- ③ 世界は分割不可能な無数の精神的実体から成り立っており、それらの間にはあらかじめ調和が成り立っていると考えた。
- ④ 精神と物体の両方を実体とし、精神の本性は思考であり、物体の本性は延長であると考えた。

問4 次の文章は、スピノザが自由について述べたものである。その内容の説明として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。[19] (2015年追試)

私は、自己の本性の必然性のみによって存在し行動する事物を自由であると言い、これに反して、他の事物から一定の仕方では存在し行動するように決定される事物を強制されていると言います。……被造物についてみてみましょう。被造物はすべて或る一定の仕方では存在し行動するように外的諸原因から決定されています。例えば、石は自己を突き動かす外部の原因から一定の運動量を受け取り、外部の原因の衝動がやんでから後も、必然的に運動を続けます。……ここに石について言えることは、(人間を含む)すべての個別的な事物について言えます。……すべての人は自由をもつことを誇りますけれども、この自由は単に、人々が自分の欲求は意識しているが自分をそれへ決定する諸原因は知らない、という点にのみあるのです。(『往復書簡集』より)

- ① 人間は、他の被造物と異なり、自己の本性の必然性によって行動する。だが、個人的な欲求に囚われている限り、人間はこの点に気づかない。このような欲求を克服することで、人間は自由となり得る。
- ② 人間は、他の被造物と同じように自己を突き動かす原因を知らないのに、自分は自由だと思い込んでいる。これに対し、真の自由とは、他から決定されるのではなく、自己の本性によって行動することである。
- ③ すべての被造物は、他から一定の仕方では行動するように必然的に決定されている。私たち人間もまた、他の事物から強制されずには、何ごともなし得ない。人間は自由でないのだから、欲求に従うべきである。
- ④ すべての被造物は、外的な原因によって突き動かされる。その外的な原因についての洞察は、神によって与えられる。そのため、人間が自由になることができるのは、被造物を超えたものの力によってである。

問5 次の文を書いた人物として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。[20]

われわれの思想も、情緒も、想像によって形成される観念も、いずれも心の外にあるものではない、このことは誰もが認めるだろう。そして、それと同様に明らかなことであるが、感官に刻印される様々な感覚ないし観念も、どれほど混合され組み合わせられていようとも、それらを知覚する心の内より他に存在し得ないのである。私が書きものをしている机について、存在すると私はいふ。すなわち、私はその机を見ているし、それに触れている。書齋を出たならば、それは存在した、と私はいふだろうが、それはすなわちもし私が書齋にいたならば、机を知覚したであろうという意味であるか、あるいはある他の精神が実際にそれを知覚しているという意味に他ならない。匂いがあったすなわち嗅がれたのである。音があった、すなわち聞かれたのである。そして色や形は、すなわち視覚ないし触覚によって知覚されたのである。これが私の理解しうるすべてに他ならない。なぜなら、全く知覚されず、自ら思考もしないとされるような物の存在について何を言われても、完全に不可解であると思われるからである。

- ① デカルト ② ライプニッツ ③ ロック ④ バークリー

第3問 次の文章を読み、下の問い（問1～問6）に答えよ。（配点 20）

16世紀から17世紀にかけて、人間の本性や生き方を実生活に即して冷静かつ精密に観察し、人間としての自然な生き方を追究して、それを随筆や手記などの自由な形式で著した一群の人々がいる。彼らは〔21〕とよばれ、近代の哲学者に影響を与えた。その代表的な思想家として、モンテーニュとパスカルがいる。

社会契約説とは、人間は生まれながらにして〔22〕をもつとし、それらの権利をよりよく保障するためには相互に契約（同意）を結んで、「法の支配」する政治社会（国家(コモンウェルス)）を設立する必要があることを説き、また政治社会を運営するために設けられた政治機関がどのように行使されれば個人の自由や生命の安全を守ることができるか、といういわば近代国家の根本問題である「権力」と「自由」との関係を民主主義的に解決する方法を提示した近代政治思想。17、18世紀の〔23〕期に登場した近代国家の正統性と存在理由を説明した政治理論であり、ホブズ、ロック、ルソーらがその代表的理論家である。

伝統的な偏見や迷妄を打ち破って、近代的な合理主義・理性重視を主張し、またそれを一般に普及しようという考えを〔24〕思想という。近代市民社会の発展に伴う科学的知識の向上・充実を背景に、人間の理性に対する絶対的信頼が生まれ、既存の非合理的な自然観・慣習・社会制度を合理的なものに置きかえてゆこうとする動きが、18世紀ヨーロッパ思想の一般的な風潮となった。これは当然、封建制度・専制主義・教会などに対する批判を生み、アメリカ独立革命やフランス革命などの近代ブルジョワ革命を思想的に準備した。ただし、民衆を無知蒙昧から救うことにのみ社会の進歩を見ようとした点にその限界をもっている。ヴォルテール・モンテスキュー・ルソーや〔25〕のディドロらは代表的〔24〕思想家で、カントもこの影響を強く受けた。

問1 文章中の空欄〔21〕～〔30〕に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

[21] ① モラリスト ② 経験論者 ③ 合理論者 ④ 啓蒙主義者

[22] ① 自然法 ② 理性 ③ 感覚経験 ④ 自然権

[23] ① 社会主義革命 ② 資本主義 ③ 市民革命 ④ ルネサンス

[24] ① 実証主義 ② 啓蒙 ③ 観念論 ④ 空想的社会主義

[25] ① カルヴァン派 ② ヘーゲル左派 ③ 百科全書派 ④ ジャコバン派

問2 パスカルの思想の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[26]
(2014年本試)

- ① 人間には外的なものから受ける影響で様々な情念が生じるが、人間は、自らの意志によってそれらの情念を支配し、自分の行動を決定していくことができる高邁の精神をもつと考えた。
- ② 考えることに人間の尊厳を見だし、特に、人間のあり方や事柄の本質を捉えるためには、推理や論証を行う能力だけではなく、直観的に物事を把握する能力が必要であるとした。
- ③ 人間にはその本性や感覚によって誤謬や錯覚が生じるが、実験と観察を通じて得られた知識によって、それらを取り除き、自然の一般的な法則を捉えることで、自然を支配できると考えた。
- ④ 自己自身を形成することに人間の尊厳を見だし、特に、人間が自分の生き方を選択し、自らの存在のあり方を決定するためには、各自の自由意志が必要であるとした。

問3 次の文が掲載されている著作として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。[27]

善良な意図も節度なく行われると、人々をはなはだ不徳な行為に押しやるということは、我々が始終見るところである。こんにちフランスを内乱のちまたと化しているあの論争において、最も良い最も健全な党派といえ、それは疑いもなくこの国旧来の宗教と政体とを維持するそれである。けれどもこれに与くみする正しい人々の間にも（じっさいわたしは、それを口実にして私の恨みを晴らそうとしたり・私欲を満足させようとしたり・王侯の恩顧にあずかろうとしたり・する者どものことをいっているのではない。もっぱら自分の宗教に対するほんとうの熱情から・祖国の平和と治安とを維持しようという聖きよい愛情から・この党派に与する人たちのことをいっているのだ）、実にそういう正しい人々の間にも、熱心のあまり理性のらちを越え、ともすれば不正で・過敏で・しかも大それた・決心をする者が、たくさんに見られる。

- ① エチカ ② エセー ③ パンセ ④ プリンキピア

問4 次の文が掲載されている著作として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。[28]

人々が社会に入る理由は、その所有物の保全にある。そして、彼らが立法部を選挙しこれに権限を与える目的は、社会の全成員の所有物の番人や防壁として、社会の各部分、各成員の権力を制限し、その支配を適度に抑えるために法をつくり規則を定めることにある。（中略）したがって、立法者が国民の所有物を奪い去り、これを破壊しようとするとき、あるいは国民を勝手気ままな権力のもとにある奴隷の状態におとしめようとするときには、必ず彼ら立法者は国民との戦争の状態に身を投ずることになり、このことによって、国民はもはやそれ以上のどんな服従からも解放され、そして神が力と暴力に備えて万人のために用意した共通の避難所へ逃れることになる。

- ① 市民政府二論 ② リヴァイアサン ③ 社会契約論 ④ 君主論

問5 次の文が掲載されている著作として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。[29]

平和のために、また自己防衛のために必要であると考えられる限りにおいて、人は、他の人々も同意するならば、万物にたいするこの権利を喜んで放棄すべきである。そして自分が他の人々にたいして持つ自由は、他の人々が自分にたいして持つことを自分が進んで認めることのできる範囲で満足すべきである」。なぜならば、各人がその好むところを行う権利を保有しているかぎり、万人は戦争の状態にある。

- ① 市民政府二論 ② リヴァイアサン ③ 社会契約論 ④ 君主論

問6 次の文章は、ルソーが憐れみ(憐憫)の情について述べたものである。その内容の説明として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。[30] (2018年追試)

憐れみの情が自然な感情であることは確実であり、この感情がそれぞれの人のうちの自己愛そのものの働きを緩めて、種のすべての個体が互いに保存し合うことを手助けする。この憐れみがあるからこそ、私たちは苦しんでいる人を見ると、何も考えずにその人を助けたいと思うのである。そして、自然状態においても、この憐れみこそが法と習俗と徳の代わりをする。自然状態の長所は、誰一人としてこの感情の優しい声に逆らおうとする人がいないということである。……理性は「汝の欲することを他人になせ」という崇高な正義の掟を教えるが、憐れみの情は、「できるだけ他人を害することなく、汝の善をなせ」という自然の善良さの教えをすべての人の心に吹き込むのである。この教えは、崇高な正義の掟ほど完全なものではないとしても、役に立つという意味ではそれを超えるに違いない。

(『人間不平等起源論』より)

- ① 憐れみは、自己愛の働きを緩めて、互いに助け合うことを可能にする感情である。この感情が人間に教える掟は崇高な正義の掟であり、理性が教える掟と比べると、より役に立つものである。
- ② 人は、苦しむ人を見ると、その人を助けようとするが、そのような経験を重ねるなかで、憐れみの情は育まれていく。この感情によって、人は自然状態を脱し、法・習俗・徳を生み出していく。
- ③ 憐れみは、互いに助け合うことを可能にする感情であり、人はそれを自然に有している。この感情が人間に教える掟は、理性が教える掟と比べると、完全とは言えないが役に立つものである。
- ④ 人は、他人が発する優しい声に触発されて自己愛を捨て去り、憐れみの情を獲得するようになる。この感情は、自然状態において、法・習俗・徳が果たす役割の代わりとなっている。

第4問 次の文を読み、下の問い(問1～問6)に答えよ。(配点 20)

カントは合理論と経験論の対立を見て、経験的な事実を無視すると合理論は独断論におちいり、かといって経験論に固執するとどんな真理にも到達できない[31]論に行きつくと考えた。そこで、カントは、真理や義務や美そのものについて論じるのではなく、それらについて判断するときの私たちの心の働き(認識能力)と、その限界を明らかにしようと試みた。カントはこの試みを「[32]」とよび、自身の哲学を構築していくのである。

カントはまず、外界についての私たちの認識は、私たちの理性が[33]に(経験に先立って)もっている形式によっておこなわれると考えた。カントによれば、外界から与えられる対象を、感性が時間・空間形式にしたがって受けとり、それを、悟性(知性)が因果性などの概念形式にしたがって把握することで認識が成り立つという(このように認識した対象を現象という)。このような心の働きによって、例えば私たちは目の前にボールが転がってきたとき、その原因としてだれかが何かをしたと考えることができるという。

若いころフランス革命に出会い、それに深く感動したヘーゲルは、そのなりゆきを注意深く見守っていたが、やがて、革命を通じて実現された市民社会が、依然として矛盾をかかえた、弱肉強食の不平等な社会であることを見てとった。そして、このような市民社会を克服して真の人間らしさが回復される社会を実現するにはどうすればよいかと考えた。

その際、ヘーゲルの考え方の根本になったことは、この現実の社会は歴史的に運動、発展するものであるということ、そこには一つの必然性が支配しており、いかなる理想もそれにそったものでなければ実現されないということである。ヘーゲルはこの歴史を根本で支配しているものを、[34]を本質とする精神としてとらえ、これを[35]とよんだ。つまり、この[35]が人間の[34]な活動を通じて、自分の本質である[34]を実現してゆく過程、それが歴史なのである。それゆえ、世界史は、一人の人間(専制君主)だけが[34]であった時代から、少数の人間が[34]であった時代をへて、すべての人間が[34]である時代へと発展してゆく過程であり、「世界史とは[34]の意識の進歩」といえる。

問1 文中の空欄[31]～[35]に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

[31] ① 唯物 ② 合理 ③ 観念 ④ 懐疑

[32] ① 論評 ② 探究 ③ 省察 ④ 批判

[33] ① アンチノミー ② アポステリオリ ③ アプリオリ ④ アポリア

[34] ① 自由 ② 幸福 ③ 快楽 ④ 否定

[35] ① 空前絶後 ② 絶対精神 ③ 階級闘争 ④ 弁証法

問2 人間の認識能力をめぐるカントの思想の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[36] (2016年本試)

- ① 時間・空間という形式をもつ悟性と、量・質・関係・様相という形式をもつ感性の協働により、認識は成立する。それゆえ、「内容なき思考は空虚」であり、「概念なき直観は盲目」である。
- ② 受容した素材を、経験に先立って存する形式によって秩序づけるのだから、私たちの認識は単なる模写ではない。「認識が対象に従う」というよりは、むしろ「対象が認識に従う」のである。
- ③ 経験を通じて与えられるのは、現象のみである。だが、与えられた現象を手がかりとして、その背後に想定される物自体についてまで、私たちは認識をひろげることができるのである。
- ④ 神、宇宙の始まり、自由、霊魂の不滅など、私たちの経験を超越する事柄に関しては、理性はこれを認識の対象とすることができない。したがって、それらの存在は否定されるべきである。

問3 カントの倫理思想の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[37] (2016年追試)

- ① 自然の世界に自然法則が成り立っているように、道徳についても道徳法則が確固として存在する。したがって、人間の現実の共同体のなかで確立している倫理規範に違反することは、決して許されない。
- ② その時々偶然の状況に応じて、適切と思える行動をとるだけでは、本当の意味で道徳的に行為することにならない。一時的な状況だけでなく、行為に関わる全体的状況を考慮に入れなければならない。
- ③ 「...を欲するならば～せよ」という仮言命法は、何らかの目的を達成するための、条件付きの命令である。他方、いつでもどこでも誰もが従わなければならない道徳法則は、無条件に「～せよ」と命じるかたちをとる。
- ④ 「...を欲するならば～せよ」という仮言命法は、物を特定の目的のための手段として利用するように命じる。しかし、人間はいかなる場合にも手段として利用されてはならず、もっぱら目的として尊重されねばならない。

問4 ヘーゲルの弁証法の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[38] (2015年追試)

- ① 事象や行為の意味を、主観的な意識を超えた社会的・文化的なシステムとしての構造に注目することによって、解明しようとする思考法。
- ② 哲学的な問題を、何よりも言語と関わっているものと捉え、言語の働きとその限界の分析によって、解決しようとする思考法。
- ③ 矛盾を単なる誤りとするのではなく、すべての存在や認識は、対立や矛盾を通してより高次なものへと展開していく、とする思考法。
- ④ 真理の判定基準は、認識と実在との一致に求められるのではなく、生きるうえでの課題の解決へと行動を導く点にある、とする思考法。

問5 次のカントの文章を読み、その内容の説明として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。[39] (2017年本試)

人は道徳法則に反した振る舞いを思い出すとき、それを故意でない過失として、どうしても避けられない単なる不注意として、したがって、自らが自然必然性の流れに押し流された出来事であるかのようにとりつくろい、自分はそれについて責めがないと宣言するために、好きなだけ技巧を凝らすこともできよう。その人は、しかし、自分が不正を犯したときにそれでも自分で判断してやったこと、つまり自らの自由を行使していたことを意識している限り、自らに有利なように語る弁護人としての自分も、自らのうちに住まう原告としての自分を決して沈黙させられないことに気づく。……悪事を自然の結果とみなしたからといって、それによってその人が自分自身に加える自責や非難から守られるというわけではない。ずっと以前に犯した行いについて、それを思い出すたびに後悔することも、以上のことに基づいている。(『実践理性批判』より)

- ① 人は自らの不正な行いを、自然界の必然性に従って生じた、自分では回避できない出来事として解釈できる。その場合、人は自分に有利に語り、自分には責めがないことを自らにも他人にも表明する自由がある。
- ② 人は自らの不正な行いについて、自責や後悔の念に駆られることがある。その場合、人はその行いが過失や不注意によるものではなく、自分の判断によってなされた自由な行為であったことを意識している。
- ③ 人は自らの不正な行いを、自然界の必然性に従って生じた、自分では回避できない出来事として解釈できる。ただし、その行いが遠い過去のことになる、それを思い出すたびに後悔するようになり、道徳的意識が高まる。
- ④ 人は自らの不正な行いについて、自責や後悔の念に駆られることがある。ただし、人の行いは過失や不注意の結果にすぎない場合もあり、その行いに対する非難から自分を守るために人は道徳法則に訴える。

問6 人倫という概念で道徳を捉え直した思想家にヘーゲルがいる。ヘーゲルの人倫についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。(2018年本試)

- ① 欲望の体系である市民社会のもとでは、自立した個人が自己の利益を自由に追求する経済活動が営まれるなかで、内面的な道徳も育まれるために、人倫の完成がもたらされる。
- ② 人間にとって客観的で外面的な規範である法と、主観的で内面的な規範である道徳は、対立する段階を経て、最終的には、法と道徳を共に活かす人倫のうちに総合される。
- ③ 国家によって定められる法は、人間の内面的な道徳と対立し、自立した個人の自由を妨げるものなので、国家のもとで人々が法の秩序に従うときには、人倫の喪失態が生じる。
- ④ 夫婦や親子など、自然な愛情によって結び付いた関係である家族のもとでは、国家や法の秩序のもとで失われた個人の自由と道徳が回復され、人倫の完成がもたらされる。

第5問 次の文章を読み下の問い（問1～問7）に答えよ。（配点 20）

功利主義とは、行為の目的、行為の義務、正邪の基準を、社会の成員の「最大多数の最大幸福」に求める倫理、法、政治上の立場。この立場を単純明快に定式化、組織化したのはJ・ベンサムで、それはミル父子により継承、発展させられた。彼らは幸福と〔41〕を同一視したが、ベンサムが七つの基準による〔41〕の計量可能性と〔41〕計算の構想を唱える「量的功利主義」を主張したのに対し、J・S・ミルは〔41〕に質的な差を認めて「質的功利主義」へと変わる。

実証主義は〔42〕が初めて用い、コントが採用して以来、有名になったことばとされ、狭い意味ではコント自身の哲学をさすのに用いられるが、広い意味では、経験を重んじ、超越的なものの存在を否定しようとする傾向一般をさす。イギリスの経験論哲学も、広い意味ではこの実証主義に入るし、実地を踏んでこつこつ証拠を拾い上げようとする探偵を「彼は実証主義者だから」とよぶのも妥当な言い方だということになる。自然科学も実証主義的な学問だとされることがある。

進化論とは生物進化の事実、機構、原因などに関する理論、またはそれらを研究する学問分野。生物の進化の素朴な考えは紀元前からあったが、近代的な進化論の芽生えはフランスのJ.ラマルクに代表され、C.ダーウィンの『〔43〕』によって不動の学説として確立され、進化論といえばダーウィン説をさすほどである。ダーウィンの進化論は〔44〕説と呼ばれたが、その後、実験生物学や遺伝学の発達に裏づけられつつ、現在の主流であるネオダーウィニズムへと発展した。

問1 文中の空欄〔41〕～〔44〕に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

[41] ① 目的 ② 手段 ③ 善行 ④ 快樂

[42] ① フーリエ ② ダランベール ③ サン・シモン ④ オーウェン

[43] ① 動物哲学 ② 種の起原 ③ 裸のサル ④ 植物発生論

[44] ① 自然選択 ② 動的平衡 ③ 用不用 ④ 優性遺伝

問2 道徳感情論の提唱者の一人としてアダム・スミスがいる。アダム・スミスの思想の記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。〔45〕（2008年本試）

- ① 自然状態における善良な人間は、自己保存を求める自己愛と他人の不幸を憐れむ同情心とを具えていた。
- ② 共感という道徳的な感情が、利己心にもとづく各人の行動を内面から規制して、私益と公益との調和が図られる。
- ③ 純粋な愛としての他者への同情によって、現象の根底にある生への意志が弱まっていけば、苦悩から解脱できる。
- ④ 他者の気持ちを表情などから思いやる共感が、心理的な発達の基礎になって、友情や恋愛などの人間関係が生まれる。

問3 人間と動物は対等な生命と考えることに関連して、次のベンサムの文章を参考にしながら、ベンサムの思想の説明として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。
[46] (2012年本試)

人間以外の動物が、人間の暴力的な支配によって奪われてきた権利を手に入れる日がいつか来るかもしれない。……脚の数が違うことや……尾のあることが、感覚をそなえた存在を気ままに苦しめてよい十分な理由にならないことが、いつの日かきつと明らかになるだろう。それなら、人間とそれ以外の動物との間に越え難い一線を引くものが、ほかにあるだろうか。思考の能力や話す能力の有無がそれだろうか。しかし、成長した馬や犬は、生後1日や1週間の赤ん坊と比べても、1か月の赤ん坊と比べても、はるかに理性的であり、はるかに意思の疎通ができる動物である。また、たとえそうでなかったとしても、そこに何の意味があるだろうか。問題は、馬や犬が理性的に考えられるかでも、話すことができるかでもなく、苦痛を感じることができるかなのである。(ベンサム『道徳および立法の諸原理序説』)

- ① ベンサムは快樂の量と質の区別を重視したため、感覚をそなえていることこそが、利益を尊重すべき存在とそうでない存在を分ける唯一の境界線になると主張している。
- ② ベンサムは最大多数の最大幸福を目指したため、幸福の量を計算できる知性をもつことこそが、権利を尊重すべき存在とそうでない存在を分ける境界線になると主張している。
- ③ 道徳感情を正と不正の判断基準にするベンサムにとって、苦しみや痛みを感じることができる能力は、言語能力や高等数学の能力のような他の能力とは根本的に異なるものである。
- ⑤ 快樂を善とし、苦痛を悪とみなすベンサムにとって、苦しみや痛みを感じることができる能力こそが、何らかの存在が平等な配慮を受ける権利を得るために必須の能力である。

問4 制裁(サンクション)についてのベンサムの思想として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[47] (2007年本試)

- ① 人々の生命・自由・財産を適切に維持するためには、各人は私的な制裁権を公共の政治的権力に委託しなければならない。
- ② 人間はもともと利他的であるから、刑罰による法律的な制裁よりも、良心に訴える内面的な制裁の方が重要である。
- ③ 人間に対して与えられる制裁は様々であるが、神による死後の裁きという宗教的な制裁が最も重要である。
- ④ 公益をそこなう行為をした者に対しては、その行為によって得た利益を上回る不利益を与えるような制裁を加えねばならない。

問5 科学万能主義の成立に影響を与えたものとしてコントの実証主義があるが、その主張として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[48] (2006年本試)

- ① 本当の知識は、合理的思考のみによって得られるものに限られるので、感覚に由来する知識は退けねばならない。
- ② 本当の知識は、観察された事実を基礎とするものに限られるので、経験を超えたものに関する知識は退けねばならない。
- ③ 本当の知識は、純粋に事柄を見る態度に基づくものに限られるが、実用のためのもので知識として認められる。
- ④ 本当の知識は、実生活にとって有用なものに限られるが、宗教的なものも、有用であれば本当の知識として認められる。

問6 「人の意思に反して権力を行使する唯一の正当な目的は他者への危害の防止である」とする原則に従う判断として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[49]

- ① 喫煙は、周囲の人の健康への影響を無視できないから、人の集まるところで制限したり禁止したりすることは正当である。
- ② 病気でもないのに、美容や装飾のために、親からもらった身体を傷つける行為は許すべきではなく、法律で禁止すべきである。
- ③ 自動車事故による死傷者の発生を抑制するために、法律で運転者にシートベルトの着用を強制することは当然である。
- ④ 命を落とすかもしれない危険な冒険に出かけるということは、他の人に害を及ぼさないとしても、国などがそれを妨げることは許される。

問7 社会進化論についての次の記述の空欄 [50] に入る語として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

歴史家は、[50] の起源を社会ダーウィニズムに求めてきたとも言われる。しかし、社会ダーウィニズムの定義は多様であり（混乱しているとも言える。）、その政治的・イデオロギ的方向性も保守から左派まで論者によって異なり、その影響力をめぐる評価も一致していない。また、社会ダーウィニズムと呼ばれるものの中には、ダーウィンよりもむしろラマルク (Jean-Baptiste de Lamarck) やスペンサー (Herbert Spencer) に影響を受けた思想が含まれているものもある。定義について見ると、狭義では、社会ダーウィニズムと自由放任資本主義の正当性の同一視（古典的な見方である。）から、広義には、ダーウィン理論のあらゆる社会的利用への適用（あるいは、ダーウィンに依拠するかにかかわらず、進化論のあらゆる社会的利用）まで展開される。よって、社会ダーウィニズムと [50] との関係についてもその見解は必ずしも一様ではない。例を挙げると、社会ダーウィニズムを [50] と同一視し、「[50] 的な人口管理を主張する言説、つまり人間の進化を、遺伝的又は遺伝主義的な説明に完全に委ねることを必要とする議論」とする定義がある。一方、例えば戦争をめぐる評価において、「生存闘争」によって遺伝的に劣った要素が一掃されるという、古典的な社会ダーウィニズム的立場をとる [50] 者も初期には見られたものの、第一次世界大戦以降は、近代戦争の反 [50] 的効果の主張が有力となっている。

- ① 遺伝学
- ② 優生学
- ③ 歴史学
- ④ 生物学

問題は以上です。